



病院創立80周年
これからも地域とともに

病院創立 80 周年 これからも地域とともに

北信総合病院

これからも地域とともに

北信総合病院とともに



中野市長
湯本 隆英

北信総合病院創立80周年という記念すべき節目を迎えられましたことに、心よりお慶び申し上げます。また、長年にわたり地域医療に多大な貢献をいただいていることに深く敬意を表しますとともに、地域住民の皆様の健康と安心を支え、数々の困難にも対応してこられた医師・看護師をはじめとする病院関係者の皆様のご尽力に感謝申し上げます。

貴病院は、創立以来長きにわたり、救急医療を含めた急性期医療をはじめ各診療科を備えた地域の中核的・総合的医療機関として、また周産期医療等の特徴的な医療の提供などを通じ、市民の健康と安全を守る「中野市民の病院」としての役割を担ってこられました。80年という年月の中で、社会や日常生活が変容し、医療を取り巻く環境は大きく変化してまいりました。医療の

高度化・専門化が求められるなど、年々ニーズも多様化・複雑化してきています。そうした中であって、貴病院は単に病気の治療を行う場所にとどまらず、地域住民の健康と暮らしを包括的に支えるパートナーとして地域に根ざしてきました。近年では、新型コロナウイルス感染症の流行において、病院を挙げて対応をいただき、この地域の医療を支え、多くの市民の命と健康を守っていただきました。

この地域において、貴病院は医療・保健の拠点として地域社会を支える唯一無二の存在であり、今後も地域の皆様の安心・安全な生活の実現に大きく寄与していただきますことを衷心より願っております。

本市では、貴病院をはじめ関係医療機関との連携のもと、医療提供体制の更なる充実のために諸施策の推進に努めてまいります。

終わりに、今後とも地域に愛される「なくてはならない病院」として、この先10年、20年、30年とさらなるご発展を期待申し上げまして、お祝いのことばとさせていただきます。

JA中野市と北信総合病院の未来に向けて



**中野市農業協同組合
代表理事組合長 望月 隆**

長野県厚生農業協同組合連合会 北信総合病院が北信地域の農村医療の拠点として昭和20年5月に長野県農業会北信病院として創立されて以来80年の歳月を経て、このたび「80周年記念誌」が発刊されることを喜び、心よりお祝い申し上げます。

顧みますと、当時この北信地域の医療事情は極めて悪く、ほとんどが無医村で総合病院も無く、医療機関にかかるには遠く長野市まで行かなければならない状況であり、そうした状況の中、「病気と貧困は共同の力で防ごう。」「農民の健康は自らの手で。」との強い信念によりスタートし、設立時は診療科目に内科、外科、レントゲン科の3科だけ、病床数も50床であったと聞き及んでいます。現在では標榜科目は30余りとなり病床数は400床を超え、医師100名を含め総勢1,000名を超える体制で医療事業に取り組み、高齢化社会に対応する農村福祉活動と地

域住民のニーズに寄り添った展開を進めると共に北信地域らしいインバウンドを含めたスポーツツーリズムにも積極的に対処されており、貴院が果たす役割はこの北信地域においても多大なものとなっています。

当JAとしても農業振興と農業従事者の健康に対して貴院に様々なご指導を頂いています。昭和30年当時ではきのか栽培における長時間労働と一酸化炭素と酸素不足による体調不良との因果関係究明。昭和40年代では冷房病が問題化しその対応と指導。まさに農業者の健康とその意識向上に貢献されました。そして「エノキ制癌効果」の研究ではエノキタケ抽出物が保険食品として販売開始され、国内はもとより世界へも研究成果が発信されています。貴院とJA中野市との密接な連携が中野市農業の礎にあることに感謝するとともに、我々関係者としてもこの上ない誇りであり、喜びとするところであります。

貴院には80年の長きにわたり、常に系統厚生事業と地域農村医療のリーダーとしての役割を担っていただいています。これまでのご尽力とご指導に対し、組合員を代表して関係役職員に対して衷心より厚く御礼を申し上げます。

今後、人口減少と高齢化の影響はさらに顕著に様々な場面に出現してくるものと思われます。我々農業・JAを取り巻く環境もますます厳しい局面を迎えることが予想されています。医療環境も今までの質の高い医療サービスを堅持しつつ「新たな地域医療構想」のもと北信地域の将来変化を含めた医療ニーズに対する対応。地域中核病院としての体制の確立。北信医療圏の基幹病院としての機能を生かした地域創りへの貢献等を掲げられ、困難な課題に立ち向かわれようとしています。貴院がこの北信地域に果たす役割は今後ますます重要となってまいります。

設立当時の激動の時代からの80年間をまとめたこの記念誌が、貴院の更なる飛躍の道標とならん事を祈りつつ、お祝いのご挨拶とさせていただきます。

北信総合病院 80周年によせて 窮すれば変ず、変ずれば通ず、通ずれば久し



長野県厚生農業協同組合連合会
代表理事理事長 洞 和彦

北信総合病院は佐久総合病院と並んで長野県厚生連の精神的支柱となっている病院です。このたび地域の皆さまのご支援を得て創立80周年を迎えることができました。関係各位には心より感謝申し上げます。80年の歴史の中で順調で業績がどんどん伸びる時があれば、低迷が続く時期もありました。今から約20年前の創立60周年あたりはかつてないほど困難な時代でした。黒歴史のこの時代を乗り越えたからこそ現在の病院があるので

す。
創立60周年を迎えた2005年頃、北信総合病院は存亡の危機に直面していました。近くに新たに設立された長野市民病院の台頭の影響は大でしたが、ただでさえ老朽化が進んでハード面に問題があった当院に追い打ちをかけるように、内科医が半減し、さらに6名いた整形外科医は0となり、両診療科の機能は壊滅状態となりました。

岳南地域も含めとんでもない数の患者が路頭に迷う羽目になりました。地域の評判は地に落ち、病院離れからさらに患者減少に拍車がかかりました。これらにより2006年度は過去最大の6億8000万の単年度赤字を計上するに至り、翌2007年度も4億2000万の赤字でした。病院全体が将来展望のない閉塞感漂う雰囲気になっていたのは間違いありません。おんぼろ病院で働く職員のモチベーションは最悪で、まさに「貧すれば鈍す、鈍すれば窮す」といった状況でした。この窮地に対し、当時の小田切徹太郎院長は病院再構築に舵を切りました。資金的には全く余裕はなかったのですが、集患と職員の行動変容を期待して事態を打開しようと試みました。結果的に何とか公的補助を受けて新病院建設の目途が立ち、2012年から5年の工期を経て新病院は完成しました。病院建築で職員が夢と希望を持ち、一体感が生まれ、これが北信総合病院再生の第一歩となりました。しかし、その後の道のりは困難の連続でした。一旦失った病院の信用はなかなか戻りません。医師不足は続きます。借金返済がかさみ経営は安定しません。そこにもってきて麻酔科の派遣中止や精神科の医師の退職などがあり、新たな診療科崩壊の危機もありました。しかし、信州大学から医師が派遣されるまでの数年間、残られた医師の献身的な働きにより持ちこたえることができました。今振り返るとこれがその後の命運を分けたような気がします。紆余曲折はありましたが、やっと2017年に全診療科でほぼ満足できるレベルまで医師が充足され、患者も大分戻ってきました。2019年度は黒字化に加え20年ぶりの年度末手当を支給することができ、職員のモチベーションが多いに上がりました。このタイミングでコロナ禍に立ち向かうことになったのは不幸中の幸いでした。病院はすでにコロナ関連補助金がなくても黒字を維持できるほど経営は安定していましたし、職員の使命感は最高潮に達していました。結果として長野県内の病院で最もうまくコロナ禍に対応できたと自負しています。やったことへの対価は大きく、職員は大いに自信を持ったと思います。

中国の古典「易教」に「窮すれば変ず、変ずれば通ず、通ずれば久し」という故事があります。20年前は「貧すれば鈍す、鈍すれば窮す」の状態だったのが、現在は「変ずれば通ず」の段階まで来ていると思います。困難な時に職員がどのような行動をとるか、つまりどう変ずるかによって組織の命運が決まります。職員は厚生連魂を発揮して、それぞれの持ち場で収入増、支出カット、事業展開などあらゆる分野で努力し結果を出してくれました。「変ず」は成し遂げたのです。

//////
今後は「通ずれば久し」です。病院の好調を10年20年維持していくのは本当に大変です。新陳代謝が必要であり、国や県の政策に柔軟に対応していくことが重要です。北信総合病院は地域に必要な病院であり、住民からも信頼されていると思います。20年前は当院に信用がなく、岳南地域のかなりの患者が長野医療圏の病院を利用していましたが、最近は大分状況が変わりました。他病院の年報の患者動態をみれば一目瞭然です。自信を持って職務に邁進し、どん底から這い上がってここまできた北信総合病院の底力を見せてください。病院の益々の発展を祈念して筆をおかせていただきます。

病院創立 80 周年記念のご挨拶



第8代院長 西村 博行

(1997年6月～2006年5月)

北信総合病院創立80周年大変おめでとうございます。心よりお慶び申し上げます。

私は1997年11月から2006年5月まで第8代院長として勤めさせていただきました。今振り返れば、激動、苦難の時期でしたが、面白かった時でもありました。

国際農村医学会で渡米中に急逝した前磯村院長の病院葬、当時長厚労中央執行委員長だった私が急遽院長に就任、長野オリンピックの救助活動の経験、須坂の量販店で毒入りウーロン茶を飲まれた方の救急搬送事件、VRE院内感染事件（NHKクローズアップ現代でとりあげられ全職員で対応している様子が報道され、地域からも温かい目で見守って頂きました）、病院機能評価への取り組み、北里大学から来ていただいていた外科の先生方との別れ、整形外科医師の開業による経営圧迫、最後の極付は卒後医師臨床研修制度の変更にによる内科の先生方の大量引揚による経営不振、そしてその責任をとっての「進退伺」提出を辞表として受理されたことなど、忘れられないことばかりです。でも他方では、厚生連体育大会で野球部、バレー部の優勝など、運動部の活躍により大いに盛り上がったこと、またその余勢を買って中国北京体育大学まで親善試合をしに行ったことなど、楽しいことも多かった時期でした。

それよりも、現在の胸部血管外科のスタートの時期に、東京医科歯科大学胸部外科より鈴木教授や、今は亡き信州大学の天野教授、そして現在統括院長の荒井先生方を迎え、馬場先生の麻酔で心臓の手術に助手として入れて頂いたこと、鈴木教授の無駄のない計算された1針1針の凄さが忘れられません。それらが全て繋がって私のような者が院長になったのだと思っています。最後は、何度も大学に伺い医師の引き上げを止まるようお願いしましたが、大学の論理優先で、不成功に終わった経過でした。

その後、馬場先生に大変ご苦勞を頂き、小田切徹太郎先生の就任となるわけですが、信州大学教授会との懇親会で、私の代わりに院長をお願いしたこともあり、また弟さんの治代先生の中野市長当選もその後の病院建設への大きな後押しとなったことは偶然のようですが、奥深い流れの表出だと思います。洞先生と南先生の信州大学第2内科からの御援助も透析を広くしていた当院への大きな力になったと思います。

北信総合病院は、民主主義的な病院だと思います。経営参加を謳っている長野県厚生連。永田先生を始め歴代の先生方や職員の皆さんが共に作り上げた北信総合病院の家風。この家風は県内他の厚生連病院にはない素晴らしいものだと思います。

今後も、時代は変わっていくでしょうが、病院の基本理念、家風を大切に、地域と深く繋がっていけば間違いなく成長していくと確信しています。

最後に、職員及び地域の皆様のご健勝とご多幸をお祈りしご挨拶とします。

これからも、地域とともに



統括院長 荒井 裕国

北信総合病院は、1945年（昭和20年）5月1日に農村医療の拠点として開院し、今年、創立80周年を迎えました。ここに創立80周年記念誌を上梓いたします。

この記念誌は、あえて紙面ではなくてデジタル版として、多彩な写真や動画をふんだんに織り交せて、2025年現在の当院の生の姿を後世に残すことを意図いたしました。編集委員はじめ関係各位のご尽力に心より御礼申し上げます。

さて、記念誌発刊に際して、今日に至る当院の歩みを、私の個人的な関わりも交えて振り返ります。当院は、開院当初は職員数21名、医師数4名の内科と外科だけの旧高井製糸跡の古建物を利用した小さな病院でありました。住民の健康意識が十分でなかった戦後直後には、地域の健康啓発が大きな使命でした。1959年には全国初の「1泊2日人間ドック」を実施。1965年に始まった木島平村全村健康管理では村民の健康増進に大きな成果を上げました。佐久病院に連なる農村医療の精神——治療のみならず予防にも自ら出向く——は、創立以来脈々と受け継がれています。

1960～80年代、日本の高度成長と歩調を合わせて、当院は信州を代表する高度急性期病院へと発展しました。永田院長のもとで近代化I期・II期工事（1965、1975年着手）により病棟を増築、中央手術室の開設、CT、放射線治療装置、血管造影装置など様々な高度医療機器を導入。診療科も次々と増え、1973年には人工透析診療が開始されました。1986年には東京医科歯科大学（現・東京科学大学）の鈴木章夫教授執刀によるこの地域で初めての心臓手術が実施されました。私も当時、東京から信越線で支援に通い、これが当院との出会いでした。こうして、高度医療の代名詞ともいえる循環器の緊急手術なども可能となりました。

私は、磯村院長と同時期の1994年に当院に着任し、2000年まで胸部心臓血管外科科長を務めました。思えば、この頃は、医師数も患者数も多くて、忙しいながらも病院全体がとても活気づいていたある意味第一期の黄金時代でありました。立て続けに来る急患を断ることなく2名の心臓外科医で手術をし続け、24時間近く手術室に居たこともありました。自分が倒れたらこの患者は救えない。今思えば、30代後半の気力と体力のなせる業でしたが、それを支えてくれた看護スタッフや臨床工学技士との息の合ったチーム医療が実践されたからこそ成り立っていたわけで、当時からメディカルとの協力体制は盤石でした。寝食を忘れて手術に没頭するかたわら、心臓手術後に病院に泊まり込み、当時まだ新築であった南病棟（1990年竣工）4階のCCUから望む冬の朝焼けの北信五岳の美しさには目を奪われ、心を洗われました。地域医療には、休日ですら気を抜けない厳しさがある一面、医者としての自らの日々が地域に暮らす患者さんとともにあることが、自らの医師としての成長につながることを学びました。北信総合病院での若き日の6年間は、その後の私の医師としてのあり様を決定づけた日々でもありました。当時まだ黎明期であったオフポンプ冠動脈バイパス術を、当院で独自に開発したデバイスを用いて永田名誉院長に施行し、その後、先生とは長年に渡って親交を得て多くの苦労話を伺えたことは私にとっての宝物です。一方で、磯村先生が、帰国後に自分が新しいヘリカルCTの一番目の被験者になると言い残されながら、外遊先で胸部大動脈瘤の破裂により急逝されたことは、心臓血管外科医として今なお最も悔やまれる出来事であります。

2000年代初頭、当院は大きな逆風に直面します。国立大学病院の独立行政法人化や新臨床研修制度、DPC制度の導入など医療の構造を大きく揺るがす様々な変革の荒波の中、大学からの医師引き上げが重なり、医師不足と経営不振に苦しみました。当時の西村院長のご苦労は、いかばかりであったかと拝察いたします。そうした危機的状況において、小田切院長が、建物の老朽化に伴う病院の再構築事業を英断。2012～2017年にかけて再構築事業が行われて建物は一新され、ヘリポート整備により災害時の受入体制も強化しました。新病棟の竣工式に招かれた際に、新しく綺麗な病院に生まれ変わった職場で、職員が生き生きと胸を張って働いていた姿が印象的でした。地域災害拠点病院、臨床研修病院、地域がん診療病院、地域周産期母子医療センター、認知症疾患医療センターなど数多くの指定・認定も取得し、洞院長のもと信州大学との連携も深まり、医師数・経営ともに回復の道筋がつかしました。

////////////////////////////////////

新型コロナ禍では、県内でも有数の受入体制を構築し、総計32,000人の発熱外来患者、1,700人に及ぶ入院患者を受け入れ、当院でのワクチン接種回数は27,600件にものぼりました。私は2022年の4月に再び縁あって当院に戻ってまいりましたが、建物は新しく変わっても、昔と変わらぬ多職種の強い連携で、病院職員が一丸となって地域住民を守り抜く姿に、この病院の強い底力を感じました。

現在、当院は総職員約1,000名、常勤医師90名超、標榜28診療科を擁する地域の中核病院として、再び大きく歩みを進めています。その一方で、目まぐるしく変わりつつある医療を取り巻く環境において現在のアクティビティーを維持し、次世代へと繋ぐことの困難さを痛切に感じております。水光熱費や材料費などの諸物価の高騰。それを価格転嫁できない診療報酬体系の建て付けの矛盾。公立病院に比較して著しく少ない公的補助金。急速に進む少子高齢化と働き手としての医療従事者の供給力低下。2年ごとに行われる診療報酬改定では、国とのイタチごっこのように、あの手この手と経営戦略を変えねばなりませんし、そもそも都市型医療指向の国の施策に少子高齢化の急速に進むこの地域の医療があてはまるはずがありません。その打開策のひとつとして、今年度は80周年記念事業の一環としての「北信クリニック」の開院や「スキー・スノーボード外傷センター」の開設をしました。これらの真価は、歴史の評価に委ねられるでしょう。

ハード面での再構築が成功を収め病院は生まれ変わりましたが、次に知恵と力を注がねばならないのは、ソフト面での再構築です。この病院が次の創立100周年を迎えた時、どのような姿に様変わりしているか、それは誰にも知り得ません。ですが、美しい日本の原風景に恵まれたこの地で暮らす人々が、子を授かり産み、育み、安心して健やかな毎日を送り、災害時にも適切な医療が受けられるために、当院は欠かすことのできない社会インフラとして存続し続けねばなりません。そういう想いを込めて、創立80周年のテーマを「これからも、地域とともに」といたしました。

「地域とともに」という創立時からのブレない使命感を心に刻み付けて、職員一同、これからも、地域の皆様とともに歩んでまいります。引き続き変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

みなさまのおかげで 病院創立80周年を迎えることができました。



院長 山寄 正志

北信総合病院はみなさまのおかげで創立80周年を迎えることができました。心よりお礼申し上げます。当院の創立は昭和20年5月1日で終戦の年にあたります。日本も今年は戦後80年になり、終戦直後のどん底から高度経済成長の時代をへて進歩、発展してきました。当院も80年の中で、病棟や外来棟などをより大きなものに建てかえ、医療機器も充実し、医師数も最近は確実に増えてきております。現在病院正面玄関の上の窓に外から見えるように「病院創立80周年 これからも地域とともに」と書かれた横断幕がはられております。80周年のスローガンとして「これからも地域とともに」ということです。これから先をみると次は100周年が大きな節目になります。そこで北信総合病院の現在から未来のことについてふれたいと思います。

急性期の診療を主に行う当院のような総合病院は、専門性がより高く高度な医療や救急医療に対応する必要があります。そのため日常的な診療はかかりつけの先生にお願いし、より高度な検査や治療が必要な時にかかりつけの先生からのご紹介にて当院を受診して頂く役割分担を基本としております。そのため紹介状をお持ちにならず当院を初診されますと選定療養費という費用をご負担していただいております。ただ北信医療圏では皮膚科や小児科の専門の病院が非常に少なく、当院に紹介状を書いてもらっての受診は難しい状況です。そこで80周年にあたる今年の大きな話題として、紹介状なしでも気軽に、そして費用負担が少なく受診していただけるように皮膚科、小児科専門の北信クリニックを当院の目の前に開院しました。当院の機能を地域の実情に合わせて分割させた形になります。

次に目指しているのが紹介受診重点医療機関あるいは地域医療支援病院の指定を受けることです。それは紹介率や逆紹介率などの数値を含め、かかりつけ医との連携、当院の果たすべき役割等具体的な基準があり、それらを満たしその役割を地域に対して果たす必要があります。ただこのような内容は国が定めた診療報酬に基づきます。2年ごとに改定され、その内容によって病院の診療、経営の状況は大きく左右されます。

さらに近年の物価高でさまざまな仕入れ価格の上昇、電気ガス水道料金の値上がり、少子高齢化と人口減少に伴う患者さんの人数や病状も変化し、働き手は減少するも外国人は増加し社会構造はどんどん変化していきます。地球温暖化に伴う極端な気温上昇での健康被害や豪雨での自然災害、また今後巨大地震も懸念されます。世界情勢にも不安材料が多々あります。この先20年で当院は100周年ですが、その頃までには世間では2040年問題と言われているものがあり、人口減少、働き手の減少が顕著で、団塊ジュニアが高齢者に入り、現在の医療・福祉制度を含む社会制度、産業構造が維持できず崩壊する恐れも懸念されております。非常に激動の時代となる可能性が高いです。北信総合病院は激動の波にのまれ押しつぶされることのないよう努力を続け、医療を中心にこの地域を守りさらに発展を目指してまいりたい所存でございます。今後とも末永く北信総合病院をよろしくお願い申し上げます。

80周年を迎える北信総合病院

—老人保健施設もえぎからご挨拶

老人保健施設もえぎ 施設長 下山 丈人



北信総合病院創立80周年おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。病院設立から80年間もの長い歴史の中には様々な出来事があったと思いますが、それらを乗り越えて今があるのは、歴代の院長や病院職員のたえまざる努力と地域の皆様の力強いご支援の賜だと考えています。それらを大切に、この先100年、150年と北信総合病院は地域の皆様と一緒にあって更に歴史を刻んでいき、益々発展していくものと信じております。

老人保健施設もえぎは北信総合病院の多大なるご支援をいただき、今年で開設29年目を迎えました。その歴史の中で18年間もの長き間、施設長を拝命させていただいたことは大変光栄に思っております。その間にも様々な出来事がありましたが、病院は陰になり日向になり私たちを暖かく見守りながら、正しい方向に導いて下さいました。利用者様に何かあれば必ず診ていただけるという病院の絶対的な信頼感を基に、私たちは介護保険の枠の中で、老人保健施設としてできることを精一杯行う事ができました。病院のご支援なしには私たちの業務は成り立たないと考えておりますので、今後とも暖かいご支援の程をどうかよろしくお願いいたします。

80周年を迎える北信総合病院

北信州診療所 所長 曾根 進



このたび北信病院は創立80周年を迎えるとのこと。80年前と言えば、太平洋戦争直後である。私自身は静岡県浜松市の出身で、浜松の小学生はその歴史を学ぶ中で必ず「艦砲射撃により焼け野原になった浜松市中心街の写真」を見る。その写真には、松菱デパートという焼けただれたビルディングがぼつんと写っている。それ以外はただただ焼け野原。浜松市の中心街は戦争で何も無くなった、とのことだった。

私が小学生の時はいわゆる高度成長期で、乱雑でありながら活気のある街並みが形成されていた。そこには見違えるほど立派になった松菱デパートがあり、そしてそのデパート地下で食べるうどんがおいしかった。まさに中心街の象徴であったと、鮮やかに記憶に残っている。しかし、そこからさらに40年が過ぎた今、そのデパートはまた無くなってしまった。車社会で街は郊外に広がり、通信販売の発達もあり、中心街のデパートという商業形態は時代の流れに合わなくなったのだろう。

ほんの20年前、私がこの地域に移住してきた時に、人口減少がここまですすむことは想像できていなかった。時代の変化が加速度的に大きくなり、少しの先もどのようになっているか見通すことが難しい。この先も北信総合病院には末永く地域医療の中心であって欲しいと願うばかりである。

そこに住む人がいる限り、医療は必要である。地域の医療を支える病院というものの存続に、少しでも力になれたらいいと思いながら、今日も働く。

Celebratory Talk Session

記念座談会



北信総合病院 創立 80 周年記念座談会

地域医療を支え、人々と共に歩み、 さらに未来へ



左より：荒井 裕国（統括院長）／山崎 正志（院長）／下田 智恵美（統括看護部長）／田中 淳恵（統括事務長）
（司会：宇山恵子（広報アドバイザー・東京科学大学副理事））

2025 年、創立 80 周年を迎えた北信総合病院。
戦後の混乱期、地域医療の確立期、そして再構築や
感染症対応など多くの転機を乗り越えてきました。
対談では、その歩みと未来への展望について語って
いただきます。



節目の年に寄せて



司会 まずは 80 周年という節目を迎えての思いをお聞かせください。

荒井 当院の 80 周年は、終戦から 80 年という日本全体の節目とも重なります。この病院がその歴史とともに地域医療を担い続けてきたことを考えると、その重みを感じずにはられません。統括院長としてこのような大切な節目の年に自分の役目が巡ってきたことに、大きな責任と喜びを感じています。

山崎 私は 13 代目の院長ですが、80 年という歴史の重さは本当に特別です。地域の方々と職員が築き上げてきたこの病院の歩みを次世代につなぐ役割を担っているという責任を強く感じます。

下田 私は 30 年以上この病院で看護師として働いてきました。この記念すべき年に統括看護部長として携われることは、長年ここで過ごしてきた身としてとても感慨深いです。

田中 私にとっても、この病院は人生と深く結びついた場所です。地域の人たち、先輩たちが築き上げてきた歴史の上に今があることを思うと、胸が熱くなります。





この病院との出会い

司会 皆さんがこの病院と出会ったきっかけを教えてください。

荒井 心臓血管外科医としてこの病院を訪れたのは、心臓手術を導入するタイミングでした。人工心肺を使った初めての手術の日、スタッフ全員の連携の素晴らしさに驚きました。あの瞬間に「この病院には底力がある」と強く感じたのを覚えています。

山崎 医師5年目のときに神経内科医として赴任しました。ちょうど50周年の年でした。とにかくカンファレンスが活発で、学ぶことが多い環境でしたね。

下田 私は看護学生時代の実習がきっかけでした。先輩の看護師たちがてきぱきと動いている姿を見て、「私もここで働きたい」と思いました。実際に働いてみると、その連携力と温かさに惹かれていきました。

田中 私は野球部の縁でこの病院に入りました。最初は短い期間のつもりだったんですが、気づけば地域との絆の深さに魅了され、長く勤めることになりました。

心に残る現場の記憶

司会 それぞれのキャリアのなかで、特に印象に残っている場面を教えてください。

荒井 昔、自分が若い頃、病院の設備も十分ではありませんでした。足りないものは工夫して作りました。たとえ

ば、手術の際に心臓を抑える道具として、食器のフォークを加工したり、さらに看護部の皆さんが加工したフォークに巻き付ける布を縫ってくれたり。本当に“現場全員で医療を創る”という感覚でした。

山崎 能登半島地震のときのことが忘れられません。1月2日、世の中はまだお正月休みでしたが、寒空の下、DMATのスタッフたちが迷いなく現場へ出発していきました。その姿を見たとき、強い使命感に胸が熱くなり、病院長として隊員たちの健康と無事に活躍して帰還することを切に願い、祈りながら見送りました。

下田 私が小児科にいたときに関わった患者さんが、成人して看護師になり、「ここで働きます」と挨拶に来てくれたことがあります。時間を超えて医療のバトンがつながったような気持ちで、本当に嬉しかったです。

田中 野球部で全国大会に出場し、優勝したときの一体感も印象に残っています。職種を超えたつながりが生まれた瞬間でした。

病院の転機と 新型コロナウイルス感染症対応

司会 病院が大きく変わったと感じる“転機”についてもお聞きしたいです。

荒井 私は2000年に病院を離れ、2022年に戻ってきました。再構築された新しい病院を見て、まずその建物と機能に驚きました。外観だけでなく職員の意識も大きく変わっていて、誇りを持って働く姿が印象的でした。



山崎 外部環境の変化も大きな影響がありました。2000年代に入り医療界では医師不足が顕在化し当院の医師数も減少、さらに従業員全体数も減り、当院の病床や外来患者数の変化に大きく関わっています。こうした環境の変化をきっかけに、病院としての方向性を常に問い続けて、社会の変化に対応できる病院に成長しました。

下田 何といっても、コロナ対応の数期間は病院の歴史のなかでも非常に大きな転機だったと思います。最初の頃は、全国的にも情報が少なく、現場は常に緊張感に包まれていました。感染経路がわからない状況で、患者さんをどう受け入れるか、スタッフの安全をどう守るか、毎日のように議論を重ねていました。

田中 事務の立場でも、コロナ対応のことは鮮明に覚えています。マスク、防護服、フェイスシールド、酸素ボンベ…。ありとあらゆる資材が不足し、電話とメールが鳴りっぱなしの日々でした。入荷のめどが立たない中で、県や他病院と連携しながら、何とか現場を止めないように、事務職員たちも必死で働きました。

荒井 医療現場も非常に厳しかったです。コロナ病棟を立ち



上げると決めてから、数日で実際に運用を始めました。病棟の改修、動線の整理、防護体制の整備を、スタッフが丸一となって行ったのです。あの時のチームの集中力と連携は本当にすごかった。

下田 防護具の着脱だけでも最初は慣れず、恐怖と戦いながらの対応でした。それでも誰一人「やりたくない」と言わなかったのは、患者さんの命と地域を守るという強い思いがあったからです。病棟の入り口に立ったときの張り詰めた空気は、今でも忘れられません。

山崎 感染症の対応は医師だけではできません。看護、事務、清掃、検査、リハビリ…すべての職種が動いて、はじめて現場が成り立ちました。あの経験は、病院全体の連携力を確実に高めたと思っています。

田中 地域の方々の支えも大きかったです。防護服やマスクの寄付、地元企業からの物資提供、温かいメッセージ。職員の励みになりましたね。

昔と今 — 変わる医療、変わらぬ心

司会 時代の移り変わりのなかで、働く環境はどう変わってきたでしょうか。

荒井 働き方や制度はずいぶん変わりました。でも、病院が患者さんの生活と地続きにあるという点は変わりません。患者さんと日常生活の距離が近いのがこの病院の特徴です。

山崎 医師の勤務体制も整い、当直明けの休みがとれるようになりました。医療の質を守りながら働き方改革も進んだと思います。

下田 看護の現場も、昔は夜勤2～3人で60床をみていた時代がありました。今は医療が高度になり、患者さんの背景も複雑化、多様化し、より責任も高まりましたが、安心して働ける環境も整ってきました。

田中 事務の面でも、昔は何でも自分たちで行っていましたが、今は役割分担が進み、医療を下支えする体制がより強固になっています。



司会 次に「北信総合病院らしさ」について、皆さんの実感をお聞きます。

荒井 正直、ひと言で表すのは難しいのですが、やはり「一体感」と「機動力」だと思います。何か起きたときに、職種や所属の壁を越えて一気に集中できるのが北信の底力です。私が戻ってきた頃、まだ新型コロナの緊張が続いていましたよね。「来週からこの病棟をコロナ病棟に切り替える」と決めたら、施設課が壁を立ち上げ、看護部・医師・事務が一斉に動線を組み替え、ベッドを一気に動かしました。あの“なんとかしてしまう”スピード感と団結力は、本当に圧巻でした。経営的に厳しい判断でも、「必要だ」と声を上げると、皆さんが前を向いて走り出してくれる。真面目さ、誠実さ、そして粘り強さが、ここには根づいていると感じます。

山崎 私は「横の風通しの良さ」だと思います。医師の世界も、かつては“極端な主治医制”の色が濃い時代がありました。でも今は、診療科の間でも、医師同士でも、そして多職種ともチームで患者さんを支えるのが当たり前になりました。体育大会や病院祭の準備で、事前調整から当日の運営まで、部署や職種が入り混じって力を合わせる。その経験が、日常診療のコミュニケーションにも活かしている実感があります。今年の体育大会は当院が主管でしたが、離れた会場を含め全体を統括してやり遂げたとき、心から感動しました。最後の閉会

式では「やり切った」という一体感が会場に満ちていました。

下田 私は「いざというときに出る底力」だと思います。再構築の引っ越しの日、当初予定していなかった医師が当然のように患者さんの移送に付き添ってくれました。患者さんも「先生が一緒だから安心」と笑顔になり、現場の緊張がずっと和らぎました。コロナ初期の物資不足のときには、医師が自ら型紙を持って看護部に「マスクカバーを手作りできないか」と相談に来て、院内の得意な方々に声をかけ、布地を集め、手縫いでカバーを量産しました。現場のアイデアが即座に行動になり、そして院内に広がっていく。まさに“人が支え合う病院”だと感じました。

田中 「アットホームさ」と「歴史に裏づけされた行事文化」です。厚生連の文化もあり、長年にわたって体育大会や病院祭を続けてきました。組合活動や委員会、勉強会など若い頃から横断的な場に出ていく習慣があり、職種を超えたつながりが自然と生まれます。病院祭は60回を超える歴史があり、今年は地域のえびす講に日程を合わせるよう全体で調整しました。既定路線を動かすのは簡単ではありませんが、「地域に恩返しする場にしたい」という思いが全員の背中を押しました。こうした行事は、医療の現場では見えにくい“信頼の土台”を育てていると感じます。





行事と文化がつくる「許し合える距離」

荒井 体育大会は、ふだん白衣を着ているメンバーが全力で声を枯らして応援し、他の事業所とライバル心むき出しで競い合う（笑）。熱量の高い共同体験が、「許し合える心」「受け入れ合う関係」を醸成します。病院祭も同じです。地域の方に医療を分かりやすく伝える工夫を、皆で持ち寄る。普段の業務とは違う次元で“顔の見える関係”を築けます。

山崎 医療は「正解を探す」だけではなく、「最善を一緒に創る」営みです。そのための土壌として、行事や横のつながりは欠かせません。連携の質は、診療の質そのものに直結します。

下田 看護部でも、いざというときの動きが早いです。顔が見えているから声を掛け合える。

田中 事務も同じです。受付・会計・医事・総務・人事・業務・施設が普段から交わっていると、緊急時に役割が自然と噛み合います。文化は、危機対応力の“見えない基盤”ですね。

コロナ禍で見えた「地域との相互扶助」

下田 当初は、医療用マスクやフェイスシールドが手に入らず、「どうするか」に全員が向き合いました。手作りのマスクカバーは象徴的なエピソードですが、あれは“ものづくり”ではなく“関係づくり”でもありました。職員のご家族が、材料や時間を差し出してくださった。こちら、得意な人に役割を託し、全員参加で乗り切った経験が、今のチームの自信になっています。

田中 寄付や差し入れ、励ましのお手紙もたくさんいただきました。飲食業などが厳しい最中にも「医療を支えたい」と物資を届けてくださったことは忘れません。いただいた善意をどう院内で分かち、現場に迅速に届けるか——ロジ面でも鍛えられました。

荒井 地域からの支援は“責任”でもあります。「応える」ために、病棟の改修や動線変更を短期間でやり切ったのも、あのときの現場の覚悟があったからです。

山崎 多職種の協働が、コロナ禍で一段と太くなりました。今、その経験が高齢者救急や在宅支援、地域連携の新しい形に生きています。





100 周年へ 医療と地域の「ベストミックス」を探して

司会 では、100 周年（約 20 年後）に向けた展望をお聞きます。

荒井 日本全体が少子高齢化の進行と財政制約に直面します。ここ長野の現場は、いわば“日本の未来の縮図”です。だからこそ、時代に合わせて「変化できる病院」であることが最大の要件です。医療の技術も制度も刻々と変わります。内視鏡・画像診断・ゲノム解析——20 年前には思いもよらなかった標準が、今は当たり前になっていますよね。私たちは常にアンテナを高く張り、「地域に必要とされる医療」を再定義し続けなければなりません。病院の統廃合や医療圏の再編も進むでしょう。だからなおさら、地域に耳を澄まし「ここに必要な機能」を俊敏に整えること。昨日と同じで

は足りない、世の中が一步進めば私たちは一步半進む、そんな気概が要ると思います。

山崎 働き手の減少は現実です。「来るもの拒まず」は大事ですが、それだけでは現場がもたなくなる局面も出てきます。一次・二次・三次の機能分担、かかりつけ医との役割分担、在宅・介護との滑らかな接続——いわば医療とケアの“ベストミックス”が要ります。診療報酬改定に合わせた病床機能の最適化（例：地域包括医療の病床設計）や、紹介受診重点医療機関・地域医療支援病院の道筋も意識しながら、救急と総合診療を中心軸に据えていく。10 年後の正解は今と違って当然です。改定サイクルを先読みしつつ、現場の実装で微調整を重ねる「しなやかな運用」を続けたいですね。

下田 DX は加速しますが、看護の本質は「人が人を見る」ことです。短い在院日数、制限のある面会、複雑な背景——「その人らしさ」を捉える難易度はむしろ上がっています。だからこそ、観察力・対話力・倫理観を磨ける現場でありたい。患者さん・ご家族からの「ありがとう」が、看護師の原動力であることはこれからも変わりません。看護の魅力を丁寧に発信し、人材確保と育成を両輪で進めたいです。

田中 「誇りを持って働ける職場」を守り抜くことが、採用と定着の土台です。働きやすさと働きがいの両立、評価と成長の見える化、そして地域からの信頼の可視化——どれも事務の責務です。北信病院で働きたい、ここで力を発揮したい、そう思ってもらえる環境づくりを着実に進めます。



若い世代へ 北信のスピリット

司会 若い世代に伝えたい「北信のスピリット」をお願いします。

荒井 「変化を恐れない」こと、そして「一体で臨む」ことです。医療は個人技で完結しません。多職種が互いの強みを持ち寄って初めて最大値が出ます。AIが急速に進化しても、「人を感じる力」は人にしかありません。目の前の患者さんの気持ちや表情の揺れを受け止める感性を、大切に磨いてほしいです。

山崎 当たり前ですが、「苦しむ人を助けたい」という初心を忘れないでほしい。受診して下さること自体が信頼の表明です。その信頼に感謝し、広い心で受け止める姿勢を持ってください。

下田 看護部の理念は「その人らしさを大切に」です。短時間で相手を理解するには、観察力とコミュニケーション力が要ります。成功も失敗も語り合い、経験を共有し続けるチームでありたい。対話を止めないことが、結局は看護の質を上げます。

田中 「若い時の苦労は買ってでも」。大変さを避ける時代

の空気もありますが、20代後半から30代の充実は、その後の自信を形づくります。一步、踏み込んでみてください。必ず景色が変わります。

もし明日、 「新人」として再スタートするなら…

司会 もし皆さんが明日、新人として北信で働くなら、何から始めますか。

荒井 患者さんのそばにいます。高度な手技はすぐにはできなくても、目を見る、耳を傾ける、心に寄り添うことは今からできます。まずは“そばにいる力”を鍛えたいです。

山崎 私は基本手技を幅広く身につけたいですね。いまは初期研修も充実し、学べる機会が豊富です。将来どの専門に進んでも役立つ基礎体力を、早めに積み上げたい。

下田 私は“挨拶”を徹底します。患者さん、ご家族、同僚、地域の方——丁寧な一声は、病院全体の空気を良くします。新人でも今日からできる最高の貢献です。

田中 私は受付の“おもてなし”から磨きます。入口の印象が、その日の体験を左右しますから。説明の丁寧さ、目線の高さ、声のトーン。基本を極めたいです。



色紙に一言：あなたにとって北信総合病院とは？

司会 最後は、色紙に一言です。「あなたにとって北信総合病院とは？」

「一蓮托生」です。立場は違っても、同じ蓮に生まれ合わせた共同体。良いときも苦しいときも、共に進む覚悟を込めました。(山崎)

私は「人(ハート)」と書きました。顔が浮かぶ職員がたくさんいます。横のつながりで心が結び合い、一体感が力になる——北信は、人でできている病院です。(荒井)



「人として、看護師として、私を育ててくれた場」。子育てや介護など生活にも生きる多くの学びを、ここで得ました。出会いに感謝しています。(下田)

「ここで育てられ、ここで活かされる」。事務は資格を持たずに入職する人も多いですが、先輩に手取り足取り教わり、階段を上がってきました。いただいた恩を、病院に、地域に、働きで返したいという思いです。(田中)

司会 ありがとうございました。80年の歩みを胸に、81年目も82年目も、地域に愛される病院であり続けられるよう、職員一同力を合わせてまいります。

